

## 平成 19 年度第 1 回宇都宮市冒険活動運営協議会会議議事録

○日時 平成 19 年 8 月 17 日（金） 10:00 ～ 12:00

○会場 宇都宮市冒険活動センター 会議室

○出席者氏名

- ・大野 薫委員 ・岩崎研一委員 ・福田智恵委員 ・佐藤ハツエ委員 ・鈴木千枝子委員
- ・石塚英彦委員 ・遠藤 忠委員(会長) ・沼尾順市委員 ・鈴木正計委員 ・五十嵐市郎委員
- ・馬場明子委員

(事務局)

緒方秀徳課長補佐, 大豆生田 將所長, 樋山順一副所長,

國井くみ子指導主事, 坂野 忠指導主事

○公開 (傍聴者の数 0人)

### 1 開 会

### 2 会長あいさつ

### 3 委員紹介

### 4 議 題

#### (1) 役員選出

竹井前副会長の辞任につき、設置要綱第 5 条により岩崎委員が副会長となる

#### (2) 報告事項

##### ① 平成 18 年度事業報告について・・・資料 1

事務局 : (資料にそって説明)

議 長 : 18 年度の事業報告について、ご質問等あればいただきたい。

岩崎委員 : アンケートは全主催事業についてとるのか。中学校のデータが足りないのは協力していないからか？

事務局 : 教育効果のアンケートは宇都宮大学平野研究室との共同研究で、全て小中学校を対象に行っている。昨年から心身の健康状態を確認する新しい質問を加えて実施したが、それが 9 月からだったため、大半の中学校は冒険活動教室終了後となり、統計学上必要なデータ数を確保できなかったことによる。今年は 4 月から実施しているので必要なデータ数は確保できる。

馬場委員 : 学童保育の利用が増えているがどんな活動内容か。指導員がつくのか。

事務局 : 園内散策や野外炊飯が多い。指導員はつけられないので、必要があればリーダーバンクを紹介している。

大野委員 : とちぎ海浜自然の家ができてから市内の小中学校は両方を利用しているが、市外の学校の中には海浜自然の家をやめて冒険活動センターだけにしたいという学校があった。そんな動きをつかんでいるか。

所 長 : 県の施設が順次閉鎖になっており、日光市をはじめとする市外の学校及び県立や私立の附属中学校から問い合わせが来ている。市立学校の利用がない秋休みをねらう学校が増えてきた。それ以外は金土日での利用しかできない。

② 平成 19 年度事業計画について・・・資料 2

事務局 : (資料にそって説明)

議長 : 19 年度の事業計画について、ご質問等あればいただきたい。

福田委員 : 合併以前の河内上河内の学校はどこで活動していたのか。

所長 : 上河内は中 1 の 4 月に高原山か南那須に 1 泊で行っていた。河内は町としては実施しないが、立志式でスキーなどに行く学校があった。小学校は臨海自然教室に行っていた。冒険に来るのは初めてである。

福田委員 : 1 泊の活動といっても活動内容は変わるか。

所長 : 授業の一環としての事業なので、県の施設と異なり指導員をたくさんつけて学校の先生とともに指導にあたっている。4 名の指導主事と 9 名の専門指導員で足らなければ臨時職員をつけて、グループごとの指導にもあたれる。

議長 : 93 校の自然体験活動の受け入れでいっぱいと考えていいか。

所長 : 学校受け入れに関しては、年間ほぼ埋まっている。その他に指導主事は学校訪問や主催担当などがあり、やりくりが大変である。固定化されたプログラムもあるが、実態に応じて学校独自のものに変えていくことが必要だ。

岩崎委員 : いろいろな団体の方に、活動についての声をお聞きしたい。

福田委員 : 子どもたちが楽しみにしている。親もうれしい。否定的な声はない。

議長 : 不登校気味の子どもたちが、学校行事だから冒険活動教室に行く、または行事だから不安で欠席するということはあるか。

岩崎委員 : 現状では修学旅行のように行事だから参加するということはある。河内上河内の中学校は急に 3 泊 4 日になったわけだが様子はどうか。

所長 : 先生は大変だが、子どもたちにはもっと泊まりたいという声もある。

岩崎委員 : いろいろな体験学習に取り組みませたいが、職場体験学習は実施するまでが大変である。

大野委員 : 昨年初めて参加したが、壁を登る子どもたちの様子を見ていて感動が伝わりすごい活動だと思った。学校便りにも書いたが、保護者にどれだけ伝わったか分からない。活動について保護者に分かってもらえば、ここの存在価値が出てくるだろう。思いつきだが、保護者の参観はどうか。

議長 : データで示すより、実感させたほうがいい。伝えるのは大切である。

鈴木正委員 : 今の子どもたちは、刃物の安全な使い方を知らず、自然の中で危険な動植物を見分けることもできないことが多い。日常生活の中で使える知恵を体感できる活動や自分で工夫していけるような活動を重視して欲しい。

補佐 : 今年子どもが冒険活動教室に参加したが、集団生活からの学びを感じた。活動についての保護者の理解は重要だ。資料を渡すなど信頼関係をつくりたい。

佐藤委員 : 19 年度の学校利用は中学校の同日利用校が多くなったが、2 町の学校に同日利用を働きかけたのか。

所長 : 同日利用は学校の規模によってきまる。18 年度は 21 校中 4 校が同日利用した。合併した学校は 100 名前後で規模が小さいので同日利用となった。

佐藤委員 : アンケートで小学生は 1 泊で大きく成長している。2 泊にする考えは。

所長 : 小学生は 4 年で 1 泊 2 日している。保育園以来の宿泊学習であり、親も心配

する。5年での2泊、中学校での3泊と体験学習の体系化ができるといいと思うので、1泊でいいと考える。

五十嵐委員：刃物に関しては子どもだけでなく先生も使えない。危険だから使わせないのではなく、安全な使い方を指導すべきである。センターの指導員が手厚いのはいいが、先生のスキルアップも必要だろう。

大野委員：先生もさまざまで、若い教員の中にはスキル不足の者もいる。冒険活動では、専門的な指導は指導員にお願いし、教員は子どものケアにあたる。加われる部分には積極的に加わって、子どもたちと感動を共有できるようにしたい。

岩崎委員：全教員にスキルアップが必要とは思わないが、指導していきたい。スキルも必要だが、子どもと一緒に活動することを大切にしたい。

所長：本来なら家庭の中で培うものだと思う。冒険では主催事業で扱っている。学校利用では学校に出向いて、先生方と一緒にテーマを定め、プログラムをつくっている。子どもたちは学校での時間の方が長いので、冒険は黒子でよく、先生が中心であるべきだ。アンケートの結果は先生方の指導の賜物である。

議長：アンケートで対人関係やリーダーシップは、1か月後に伸びている。冒険で芽生えたものが学校での指導を経て育っていることがうかがえる。自然の感性は、実施直後は上がるが1か月後には下がってしまっていた。しかし、近年は、自然に関することも落ちていない。先生方の自然体験活動に対する見方の変化かもしれない。

福田委員：先生方の冒険活動教室引率経験率はどのくらいか。

所長：広域人事で全く来たことがない人もいるが、休みの日に下見に来るなど含めると相当のべ人数になると思う。

大野委員：何回か経験していくうちに、日常生活の中でも“危ないからだめ”ではなく、何とかクリアさせることが大切と考えるようになる。

議長：教員の専門性のためには、冒険でのノウハウの蓄積が役に立つ。

鈴木千委員：先生のための自然体験活動研修会は全く初めての方を対象とするのか。

所長：担当学年以外で、全く初めてでも体験・研修できる機会を設けた。

議長：免許更新制の話もある。学校現場での研修だけでなく、自然の中で子どもを育てる環境で、専門の指導員による研修もすばらしい。

岩崎委員：学校はそんなに簡単などころではない。当然研修で変わるが、テクニックだけではいけない。生徒とどれだけ接することができるかという人間性が大切だ。子どもとの接し方を学んで欲しい。

補佐：昨年は市政研究センターに在籍したが、地域での活動経験のない親から地域での活動経験のない子どもが生まれるという負の連鎖が起きている。しかし、冒険を2回経験した子どもが親になっていく。子どものうちにこのくらいなら大丈夫という体験があれば、大人になってから判断ができる。長い時間がかかるが、負の連鎖が正の連鎖になりかけている。

所長：市の新人研修で男女混合でイニシアを実施している。仲間づくりに大変効果がある。子どもだけでなく大人のコミュニケーション能力の訓練にも役立つ。

(3) 協議事項

① 冒険活動事業の充実 ～利用促進について～ . . . 資料 3

事務局 : (資料にそって説明)

岩崎委員 : 冬場の活動の目玉になるものはあるか。

所長 : 11月のフェスティバルでは通常できない、ポストマンズウォークやクライミングウォールを実施している。天気がよければ二千人ももの来場者がある。子どものもりの集いでは人数に限られるがクラフトなどの活動をしている。

五十嵐委員 : 冒険でなければ体験できないような目玉となるプログラム開発が必要だ。

所長 : 地区の高齢者の会や農産加工所とタイアップして事業を実施してきた。地域との連携の中で探していきたい。

沼尾委員 : 市との連携というと自然を利用したハイキングなどが適当か。景色がよくなる秋冬のハイキング客は多い。最近、地域の連携ということで、高齢者や防災、学校関係など増えてきたが、子どもの参加が少ない。

岩崎委員 : 学校では地域との交流を図るために部活動を休みにして参加を呼びかけるが参加しない。家庭と地域、学校の協力がうまく取れていないのは事実だ。

沼尾委員 : 理解のある先生によると部活単位で参加・協力してくれるところもある。

岩崎委員 : 昔は育成会などで強制的に参加させた。今では選手が集まらず中学生種目がないこともある。地域の行事に参加させるならば、育成会等で生徒の仕事や役割を決めて、学校が協力するという体制を整えることが大切だ。

沼尾委員 : 小学校中学校と冒険に2回来ることや社会体験学習は、子どもの成長に必ず役にたっている。しかし、保護者は子どもの感動を知っているのだろうか。危ないからと、子どもを出すことを望まないのかもしれない。

大野委員 : 昔は家庭・地域・学校と日常生活のどこでも体験によって学べた。ところが便利な社会になるに従って大切な部分が抜け落ちてしまった。それぞれの役割を分担しながら互いに協力することが大切だ。学校の先生に地域行事に参加を強制することは難しいが、何とか両立させて協力して欲しい。

議長 : 家庭・地域・学校とそれぞれの教育的役割を果たしながら互いに連携を深めていくのは難しい。ぜひ、子どもたちのためにこういう施設を有効活用し、自然体験活動を通して次の世代を生きる子どもたちを育てていきたいと思う。キャンプ協会では冬の活動はどうか。

石塚委員 : 冬の自然の特性を生かし、自然をじっくり見る活動がいいのではないか。

佐藤委員 : 秋冬に宿泊の主催がないが、GSでは炭焼き体験をしている。煙やにおいから温度や炭のできぐあいを予想するなどいい体験ができる。

議長 : その他の話題があれば出してほしい。

福田委員 : 市P連では親学として、親自身が子どもとしっかり向き合えたり、地域の行事に参加したりできるような取り組みを考えている。

五十嵐委員 : レストランが変わって味が落ちたという意見が出た。

岩崎委員 : 看板が少ないのではないか。

議長 : 時間も過ぎてきたので、ここで議事を終了させたい。